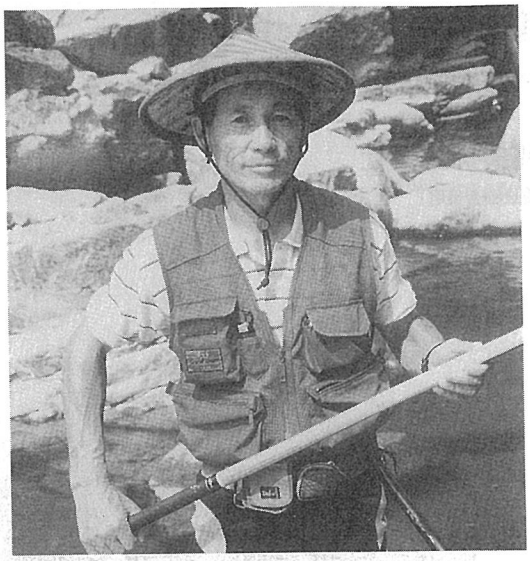
[……鮎釣りの"英才教育"受けました……]



Shinichi Ida 井田信一

●大成環境株式会社　代表取締役
出身／奈良県吉野郡十津川村
血液型／O型
信条／誠実に生きたい
好きな言葉／忍耐
嫌いなこと／影日向のある人

釣具メーカー主催の大会に何度もエントリーする鮎釣の実力派、井田社長。子供の頃から吉野の自然の中で体で覚えた渓流釣の極意と、鮎の気持ちを理解するという境地を教えていただきます。綿密なデータと鮎の姿にこだわる美学、将来は釣の合間に見続けてきた、水環境にお返しをしたいという夢もあるようです。

●●●

美しい河川あってこその鮎

（まず井田さんの「鮎釣り記録アルバム」を見せてもらう）

——この写真「平成8年8月8日の鮎」とありますね。マルハチの日というか、すごい縁起ものですね。

井田『なかなか姿がいいでしょう。こういうふうにして、日にち、天気、水の状況、魚の形なんかを残しておくんです。次にすぐポイントがつかめますからね。』

——鮎の姿かたちというのは、鮎釣りをする人には大切な条件なんですか。

井田『私にとっては重要な点ですね。私は、釣れても魚の形の悪いところへは行かないんです。たとえば解禁は6月の末ですけれども、それから一ヵ月ぐらいは我慢します。魚が小さくて姿が良くないでしょ。』

——すると今頃はもういても立っても…

井田『そう！今日も行きたかった（笑）。だいたい一般の方は、鮎釣りはお盆まで、という感じなんですね。お盆を境いに網漁がはいります。「引っかけ」ですとかね。するともう、鮎の量は半減します。川の底に網を張って、上から火で追うんです。竹の棒に金具みたいなのをつけて、ガチャガチャと水をかき回す。音と火で鮎は驚いて逃げ回るわけですね。ですから今頃の鮎はみんな傷がある。』

——じゃあ、今残っているのは百千練磨の強者ですね。釣るのが難しいんじゃないですか。

井田『そうです。音や火やらの恐怖で、出てくることに臆病になってるんです。でもいくら恐くても、エサを食べなきゃいけないから、出ては来るんです。ところが竿の影が映るだけでビューッと逃げていってしまう。

――鮎のエサというと石に付いた苔ですね。

井田『鮎釣りは「鮎を釣る前に石を釣れ」と言うんです。鮎はね、口を石にこすりつけるようにして、苔を喰むんです。ところがこれ、古い苔は食べない。今朝ついた苔、あるいは夕べついた苔。つく石は決まってるんですね。そこに、鮎が餌を喰んだ「型」がある。それを見て、あ、ここは魚が小さいな、とかがわかるんですよ。』

――去年と今年では、釣果はいかがですか？

井田『去年は悪くて、600を切りましたね。魚も良くなかったし、放流も少なかった。天然もあがってこなかったですね。』

――同じ鮎でも天然と養殖では、あらゆる面で違うと聞きますが。

井田『それはもう全く違います。闘争心、縄張り意識、姿も違えば香りも違う。たとえば、琵琶湖産の鮎は生まれた時から一人で、縄張りを持ちますね。ところが養殖の鮎はみんな一緒。一緒に生まれて、一緒にエサを食べて、水がゆるやかに回ってるぬるい流れの中で一緒に泳いでいるわけですよ。だから放流されても群れをつくってます。縄張りも持ちません。オトリ鮎が近づいていっても追わないんです。「あら、あんたも来たの。一緒に食べましょ。どうぞ、どうぞ」てなもんです。』

――うーん。それが養殖鮎の行動学ですね。天然はその反対？

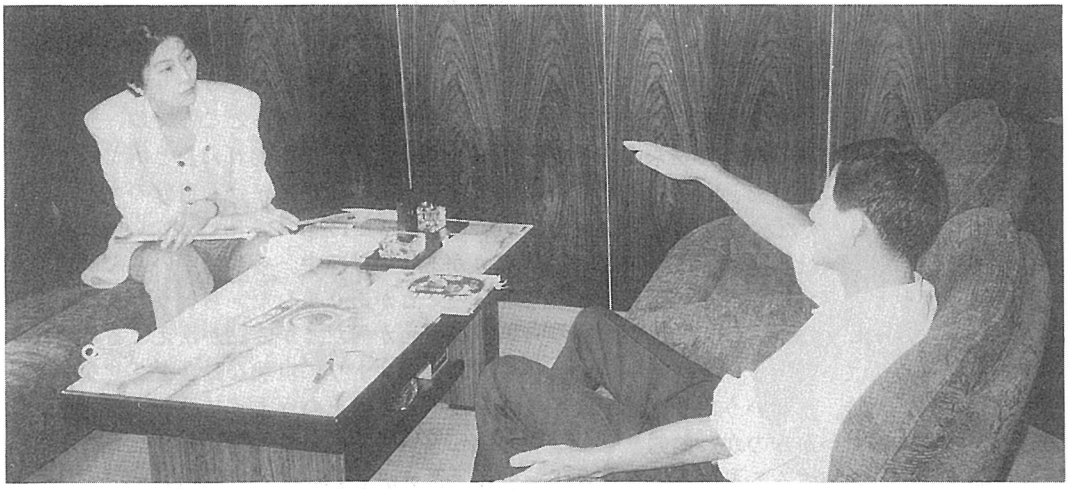
井田『オトリが自分のエリアに入ったら、それこそ目にもとまらぬ速さでやってくるわけですよ。釣ってみると、やはりそういうのは海産ですね。みんな仲良く…の集団は網用ですね。』

――鮎を香魚といいますね。香りも大切な条件のようですが、それぞれ違うんですか？

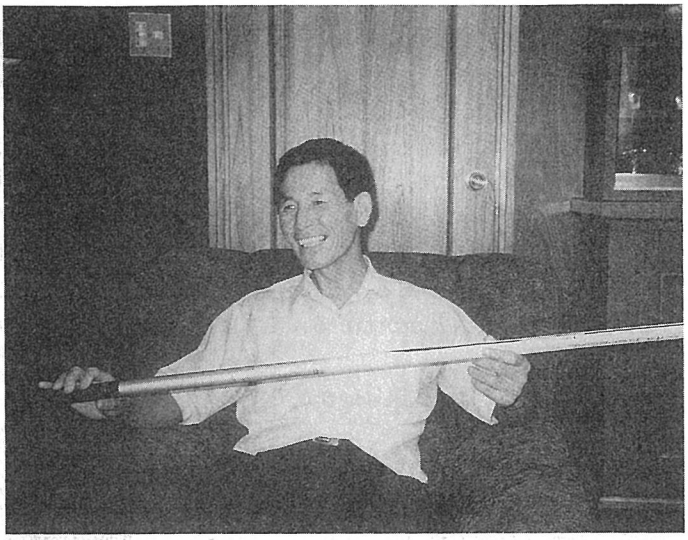
井田『今ね、河川の水がどんどん汚れてきてるでしょう。生活排水ですとかいろんなものの影響で苔が悪くなってきてますから、鮎の香りにも影響がでてきましたね。ハラワタの香りが違います。木曾川のはどうも臭い。一番いいのは馬瀬川ですかね。』

――馬瀬川には、よく行かれるんですか？

井田『馬瀬川の支流の上の方に、和良川というのがあるんです。そこに馴染みの鮎釣りの店があって、いつ行っても泊まれるし、いつも奥さんが弁当持たせてくれる。そんなとこなんです。オトリの鮎も、私の番号がありまして、勝手に



あけて持っていって、釣ってきたヤツを帰りに補充しておくんです。そこのご主人が釣った鮎が、農協の定期便で築地に出されて、赤坂の特定の料理屋におとされるんですが、馬瀬川の鮎が一番人気があるんです。テレビや新聞でよく見るような方達が食べるんでしょうなぁ、目をむくような値段らしいです。』



――そんな鮎を井田さんも釣っているワケですね（笑）。

井田『10年以上も前の話ですが、そこのご主人が「井田さん、6、7、8、9の4ヵ月だけ来て、鮎釣ってくれたら、朝昼晩と食事付きで月50万出す」というわけですよ。私はれっきとした本業があるしねぇ。とうてい無理なんだけど、まだ言ってるんですよ。こないだ10万あがって60万になった（笑）。』

――しかし、見込まれたものですねぇ。プロに誘われるとは…。

井田『何しろ子供の頃から鮎と向き合ってるわけですよ。私は奈良県吉野郡十津川村というところの生まれですが、家の裏の石段をトントンと降りてくと、吉野川が流れてるんです。うなぎつかまえるか、鮎つかまえるしかない。それはもう、きれいな川でした。

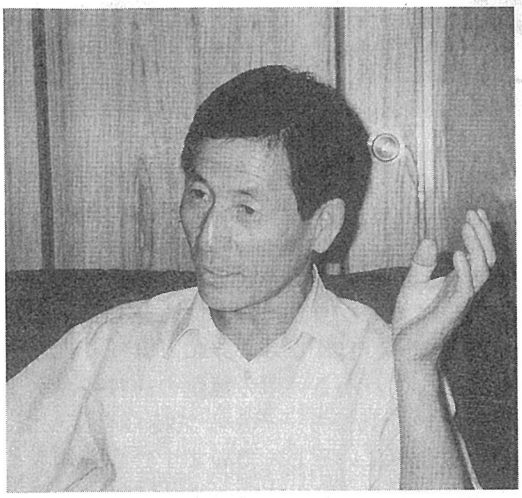
祖父が鮎釣りの名人と言われてた人でしてね、私が小学校4年の夏休みに「今年から鮎釣りを教えてやる」と言うんです。ところが、その年は一度も竿なんか握らせてくれない。水中メガネつけて、首まで水につかって、おじいさんが釣ってる側で毎日毎日、ただ水の中を見てるだけ。それだけなんです。あと何も教えてくれない。でもそれで、鮎がどういうところに生息しているのか、どういうふうにしてエサを食べるのか。どういう動きをして、どういう石につくのか。オトリが侵入した時、どういう攻撃反応があるのか。どういう時にかかるのか。鮎釣りをする上で、鮎を知る、観察することの大切さを学びましたね。』

――すごい…英才教育ですね。一般の方とスタートから違うんですね。今は、どういう気持ちで鮎釣りに臨んでいらっしゃるんですか。

井田『今はまず川を見ます。そしてオトリを泳がせる。泳いでいくオトリは私そのものですね。すーっと、私が泳ぐようにオトリが泳いでいきます。オトリ鮎の気持ちになってるわけですね。』

――そんな気持ちになるにはずいぶんかかるんでしょうね。

井田『10年、20年とやってる人でも、まだまだオトリを引っ張り回している。鮎を思いどおりにしようとするんですね。そういう気持ちが強くなるとかからない。あるところでね、先に来てた人たちが『釣れん、釣れん』とボヤいてるわけです。そこへ私がスーッと自分のオトリ鮎を放した。すると1メートルも行かない内にもうアタリがあるわけです。それでずいぶんびっくりされたことがありました。ちょうどまた今頃はね、網だとか何だとかで鮎が怯えてる時期だから、よほどオトリに自然な動きをさせないとかかりません。石をぬうように泳がせる。オトリが向こうへ行くのをこっちへ来させようと引っ張ると、鼻が上を向く。これではかからない。9月にはいると、縄張り持ってる鮎が、いつもい



つも追いかけてくるとは限りませんしね。子を持ってるんです。自分のことで精一杯。朝夕の涼しいときに一回づつくらいしかエサを食べに出てこない。その時、習性でピュッーと追ってくることがある。その時を逃すと身重の鮎といえど、電光石火のごとく、はるかむこうに行ってしまうわけです。』

―― ハァーッ。観察と経験値と技術というか鮎釣道、鮎の心理学、奥が深いですねぇ。

井田『飽きませんねぇ。釣れなくてもその時を楽しむ、というのがあります。山へ行き、きれいな川を見てきれいな空を仰いで、きれいな水に向かって、そこに一点集中。これがいい。今は水が澄んでて、2、3、メートルの深いところで27、8センチの大きい鮎がオトリを追ってね、オトリは鼻つけられてるから思うように動けない。あなたまかせです。キラキラキラキラと水底で2匹がからまって、手応えが来て…。何千匹釣ったかわかりませんけど、この感動だけは変わりません。』

―― まさに、至福の時ですね。名人・達人の域にある人にしか言えない言葉だと思います。

井田『いやぁ、死ぬときは釣りながら死にたいですね。保険金が倍になる（笑）。それは置いといても、やはり鮎釣って死ぬ。』

―― いい人生でしたね。何か亡くなられた人に言うみたいですが（笑）。

井田『仕事を引退したら、今度はお世話になった川に恩返しをしたいという気持ちがあるんです。最近の釣り人のマナーの悪さ。これは目に余ります。彼らの残していったゴミが水に流され、川を汚し、海を汚すんです。生活排水とかいろんな問題もありますが、釣りの楽しみは川の楽しみでもあるんです。もっと川を大切にしてほしいですねぇ。少しでも、いい水質を保ち、多くの人にこの楽しみを知ってもらいたいし、そのために貢献できるような仕事をしたいですねぇ。もちろん奉仕としてですよ。』

―― 井田さんはお声が明晰でお話しのテンポや語彙の豊かさもすばらしいと思います。講演とかなさっては？

井田『漁業組合とかからね、頼まれて行くこともあります。きれいな川や環境のためにできることなら何でもやりたいですね。このままでは、川は本当にダメになってしまいますから。』

―― うーん。行政に聞いていただきたいお話しで締めくくるところなど、お話しの方も“達人”とお見受けしました（笑）。

INTERVIEWER

花井　美紀

（株）コミュニケーションデザイン代表
イベント司会・コーディネイター、
ビジネスマナーインストラクター、
信用金庫協会女子職員講座の専任講師。
TV、ラジオ等で現在活躍中。